

# インドネシアにおける日本軍政府は植民地政府であるか解放政府であるか —社会文明開化からの見解—

I Ketut SURAJAYA  
(University of Indonesia, Jakarta)

## 1. はじめに

インドネシア語では *penjajahan* という言葉がある。*Penjajahan* は英語では *colonialism* の意味だが、日本語では植民地主義の意味である。また、*pendudukan* という言葉もある。*Pendudukan* は英語では *occupation*、日本語では占領の意味を持っている。そのほかには *pembebasan* という言葉がある。*Pembebasan* は英語では *liberate* の意味だが日本語では開放する意味を持っている。

インドネシアの近代史の中で特に1942年-1945年のインドネシアにおける日本軍政府時代にこの三つの言葉、つまり *penjajahan* や、*pendudukan* や、*pembebasan* が、よく使われる。論理的にはこの三つの言葉は各々の定義を持っているが、*The Merriam Webster Dictionary* で見ると、*colonialism* は *control by one power over a dependent area or people; also a policy advocating or based on such control* とされ、*occupation* は *the taking possession property, also the taking possession of an area by a foreign military force* で、*liberate* は *to free from bondage or restrain; also : to rise to equal right and status* とされる。

下記では、インドネシアの日本軍政府のあり方を理解するには、「*colonialism, occupation, liberate*」という三つの定義を政治的、社会的、文化的の面から議論されたい。

(a).政治的には、日本軍政府が、インドネシアを占領していたがいわゆる植民地になかった。1942年3月、日本陸軍と海軍がインドネシアを侵略した当時、インドネシアはすでに350年以上オランダの植民地であった。この場合はオランダ植民地軍と戦ったため日本軍はインドネシア国民を解放したという見解ができるのである。この点から見ると当時の日本軍は、解放軍であると理解することができるだろうと思う。

(b).社会的には日本軍政府がオランダ植民地政府及び連合軍と戦うためにさまざまな社会動員を行った。農産物開発、国民教養、国民軍制の訓練、婦人組合の動員など日本軍政がインドネシア社会の啓発を図ろうとする運動を行ったと思われるのである。この面には日本軍政府はインドネシア国民に対するliberate（解放軍）としての役割を果たしたとも言えるだろう。さらに日本軍政府は解放軍であると同時に社会啓発の役割も果たした。しかし、日本軍政府は圧迫を加える厳しい社会動員を行ったため、インドネシア国民は生活が貧しくなった。この歴史状態を見ると日本軍政府は占領軍（*military administration or occupation*）であると見なすべきであろう。

(c). 文化の面から見ると、日本軍政府はさまざまな動員を行った他、新聞出版と同時に文化宣伝も行った。文化宣伝の内容は東アジア文化が平和及び和の文化であり、同じ伝統を持っていると言っている。それに対して、西洋文化は侵略的文化であり、太平洋戦争は東アジア国民を解放する目的で、西洋文化を持っている連合軍とも戦うべきであると日本軍政府宣伝部が盛んに宣伝した。

## 2. 世界状況を直面した日本軍政府

日本軍がなぜ南方政策をするかについては、いくつかの理由がある。1930年代の国際状況を見ると次の軍部の考え方がある。東インド（インドネシア）及びマラヤ半島を占領すると、連合軍のイギリスとアメリカの軍力を分断することができる日本軍政は強調した。世界恐慌に当たって、日本の経済危機を再建設するために軍部は満州事変の道を辿った。The great power（帝国主義国家）の対立の中に日本軍政は1936年日本帝国防衛政策を修正した。新防衛政策によると、日本帝国の敵（*enemy*）はロシア、米国、フランスや中国である。さらに、1922年のワシントン条約は米国の反日ストラテジイであると軍部は考えていた。この条約の規定では、艦隊の割合は、米国5：イギリス5：日本3であることは事実である。

## 3. 日本軍政府の占領組織

ジャワ島における日本軍政の占領組織は次のとおりである。政治的に最高権力を持っているのが軍司令官（*Panglima Tertinggi Tentara*）であり、軍司令部は最高占領組織である。軍政官部（*Pemerintahan Militer*）は軍政官により一般占領を実施する機関であり、第16陸軍の参謀長（*kepala Staf Umum*）の役割を果たす。軍政官部は軍司令部の下部機関であり、さらに軍政官部はオランダ植民地政府の代わりの機関である。軍政官部は八つの客長からなっている、すなわち、大蔵、裁判、産業、宣伝、警官、運輸、国際、総務局である。総務部長は重要な役割を担っており、他の客長を指導し、占領の政策も作成する。総務部の下に企画課があつて、インドネシア国家主義

者に影響を与え、インドネシアにおける政治状況を観察し、さらに総務部に報告を出す。軍政官部はオランダ植民地政府を再組織化し、三つの州を17州にし、これらは、オランダ時代の*keresidenan*と同じである。州は県に分け、県は郡に(オランダ時代の*kewedanaan*)、郡は村に(オランダ時代の*kecamatan*)、そして、区及び村(*desa*)に分けると決められた。その以外に、市(*kota praja*)があって、市を4区(*distrik kota*)に分け、さらにジャカルタは特別市と決めて、*Kesultanan Yoyakarta*と*Kesultanan Surakarta*は公地にする。

#### 4. 陸軍と海軍の相違的な占領政策

今日に至るまで、日本軍政府がインドネシアの独立を支持していたかどうかは大きな議論になっている。インドネシア独立を支持する日本軍政はジグザグな道を歩んだ。1942年3月8日に連合軍下のオランダ軍司令官の*H.Ter Poorten*大将(*Letnan Jendral. H.Ter Poorten*)が日本軍の今村大将に降服した後、インドネシアにおける日本軍政府による占領政策が始まった。占領下の政策では、インドネシア占領地域は三つに分けられた。それは、(1)ジャワ島とマドラ島は第16陸軍が管理しジャカルタに軍令官部を置いた。(2)スマトラ島は第25陸軍が管理しブキトチンギに軍令官部を置いた。(3)カリマンタン島、スラウェシ島、ヌサテンガラ諸島、マルク島、西イリアン島は海軍の南方第2艦隊が管理しマカサルに海軍官部を置いた。三つの軍官部は平等であり、それぞれの占領地域において、占領政策を実施した。この占領政策の厳しい取り扱いにより、インドネシアの独立運動を指導する指導者の動きはますます困難になった。

他方、陸軍と海軍の占領政策には、根本的な相違があった。つまり、海軍のほうが陸軍より保守的で、占領地域を将来には日本帝国の領域にしようとする占領政策であった。そのせいで、海軍占領地域ではインドネシアの独立運動はより激しい弾圧を受けた。陸軍と海軍の占領政策によると、ジャカルタで占領武官府を開いた。海軍の前田正(*Laksamana Maeda Tadashii*)は武官府の官府長であった。武官府の役割は、陸軍と海軍の*laison office*以外に戦前線及びマカサルにある海軍占領府の食料かつ物質の集中を得ることであった。海軍占領地域は経済面では困難な地域であった。海軍軍政府はインドネシア独立運動家を厳しく弾圧したが、前田武官府長は、独立運動家と親しい関係を結んでいた。陸軍、海軍、独立運動指導者との複雑な関係の中で、1945年8月16日の夜、前田武官府においてインドネシア独立宣言のための草案がインドネシア独立準備委員会により作成された。

#### 5. オランダ教育制と日本軍政の教育制

オランダの植民地政府は350年間インドネシアを独占的に支配した。当時インドネ

シアの社会構造は半封建主義且つ半資本主義であった。オランダ植民地政府の教育政策は一般国民のためではなく、一部の貴族階級向けの植民地主義政策の教育である。学校制度も西洋人向けの制度であり一般国民の教養のためではなかった。教育の目標は一般インドネシア国民を教育するのではなく、植民地政策の経営をより円滑に、つまりインドネシア人の中から行政・文化などの分野における専門家を生み出し、彼らの活動を中間媒体としてその社会全体のある程度の向上を図ろうとする、いわば植民地支配のための近代的合理的再編成にあった。そうすると、インドネシアにおけるオランダの植民地はある程度部分的にインドネシア知識人を利用するだけである。つまり、オランダ植民地政府は間接的にインドネシアを支配したともいえよう。オランダ学校に入るインドネシア国民は貴族階級（フリヤイ層）及びインドネシアのエリート階級だけであった。にもかかわらず、その一環として西欧式教育の普及の勢力があった。この西欧式教育を受けたものの中から徐々に民族意識に覚醒し、植民地支配のもとで沈滞している社会の向上を促そうとする人々が出現してきた。言い換えれば、西欧的教育を受けた知識人エリートは民族主義的組織の先駆者であった。

逆に、日本による占領はインドネシアの知識人を利用せずに直接軍政が政策を行ったのである。それはインドネシアの社会に新しい圧力を加え、土着の政治活動体制を大幅に再編成したが、インドネシアの反占領者勢力が急速に成熟していくことを可能にするまったく新しい環境を作り出した。したがって、日本軍政のインドネシア支配は、オランダ植民地政府の支配と異なった。日本軍政の方法はオランダ政府植民地の方法と鋭いコントラストをなした。オランダ植民地政府は利己的による統治で十分だとし、国民が平和で平穏であれば、その状態に満足していた。

日本軍政は、太平洋というきわめて異なった政治的情勢のなかで、自国の政治利益のためにインドネシアの積極的な支持に苦心した。だが、日本軍政府は一般国民の国民主義認識を向上させ、インドネシア語を *national official language* として広めて、すべての学校でインドネシア語を使うべきだという教育政策を実施した。言いかえれば日本軍政府の教育政策は天皇主義のイデオロギーに基づきながら、反西欧主義且つ国家主義の思想基盤を持っていたと思う。それにもかかわらず、インドネシアにおけるラディカルな反植民地国民運動は日本軍政下の時期に発生した。これは社会文明開化の教育が実現されて、インドネシアの国民に独立精神が芽生えたからだと思われる。

## 6. 反日本軍政府運動の勃起

日本軍がジャワ島に進出した後、当時は原住民に熱心に歓迎され、東京のラジオ番組もインドネシア国歌の *Indonesia Raya* を放送したそうである。日本軍の飛行機も日本軍とインドネシア国民の猛烈な友好の写真を配って、兄子分としての日本はイ



インドネシアをオランダ植民地政府から開放したのだというような印象が見られた。日本軍政の占領政策は、インドネシアを開放しながら、インドネシア人官僚を採用することであり、彼らは日本軍政の厳格なコントロール下に置かれたが、それでも自分の能力に目覚め、またその結果として自信を持つようになった。日本軍政の占領に対する支持を獲得するために、国家主義指導者たちと友好的な関係を結ぶ必要を認めた<sup>1</sup>。だが、この友好的な関係は2週間しか続かなかった。その後すぐ軍政の激格的占領政策が実行された。

1942年3月20日、日本軍は国民集会、政治運動の場では、*merah putih*（赤白国旗）を日の丸国旗に代えて、という指令を出した。結果としては、インドネシアの国家主義の指導者たちは日本軍政府に対して、文句を言い出し始め、反日本軍政の態度を広めた。1943年末に太平洋戦争戦場各地におけるアメリカ軍の攻勢により日本軍はますます弱くなって来た。インドネシア国民の協力を得るために、1943年1月23日に日本首相の東条英機は参議院本会議で「本年の間ビルマとフィリッピンの独立を約束」<sup>2</sup>。当時インドネシア独立について東条英機は何も云わなかった。だが、インドネシア国家主義指導者のスカルノ（Sukarno）・ハッタ（Hatta）は軍政官部に批判を表明した。スカルノ・ハッタは「軍政部が約束を破ったため、これからインドネシア国民は戦かって自力で自国の独立を獲得すべき、日本軍政官の約束は今後信頼できない」と語った<sup>3</sup>。

インドネシア国家主義運動の盛り上がりを見ると、1943年4月末に東条英機は青木大東亜共栄圏の大臣をジャカルタに派遣した。ハッタは青木大臣との会見時に、再び質問を出し、「なぜインドネシアを差別して、ビルマやフィリッピンと同じような地位（*status*）にさせなかったか、なぜインドネシア独立の約束を破ったか」と鋭い質問を出し、「もしインドネシアをビルマとフィリッピンと同じようにしなければ、これからインドネシア国民は日本軍政府に協力しない…」とハッタが強く言い出した<sup>4</sup>。ハッタは二点の要求を出した。第一点はインドネシア国歌の大インドネシア（*Indonesia Raya*）とインドネシア紅白国旗（*Bendera Merah Putih*）を自由に使用できるようにすべきこと、第二点はインドネシア諸島を占領軍政府により統一されるべきである。このハッタの要求に対して、青木大臣は東条英機に伝えると約束した。青木大臣訪日の結果、インドネシアの独立について代表事務所（ライソンオブイス）で討論が行われた。東条英機首相、重光外務大臣、青木大臣はインドネシアに独立を与えるように勧めたが、陸軍・海軍代表がこれに反対した。

1 John David Legge, インドネシア歴史と現在：学際的地域研究入門、（中村光男訳、The Simul Press, Inc., Tokyo, Japan, pp.224-225）

2 Soetopo Soetanto, “Pendudukan Jepang dan Kemerdekaan Indonesia（日本占領とインドネシア独立）” 第五回インドネシアに於ける日本研究全国ゼミナーの論文、ダルマプルサダ大学、1990年11月29日-12月1日。

3 同上

4 同上

もしインドネシアに独立を与えるとすれば、さらに「インドネシア国家主義に政治権利を与えることになり、地方資源支配における危険が生じることになるであろう」と陸軍・海軍が反論した。この問題の解決ために東条首相は中間的な決定、つまりビルマとフィリッピンの独立約束に対しても中止を決定した。インドネシアの独立要求に対してライソン会議でインドネシアにおける政治参与を拡大し、軍政府はもっと多くのインドネシア人代表を政治に参加させることを決定した。

1943年7月16日に東条首相は衆議院本会議の演説で「本年にマラヤ、スマトラ、ジャワ、カリマンタンとスラウェシの人々に政治参加を与えるつもりである」と語った。この演説には、インドネシア民族あるいはインドネシア国民の意志と関係なく、直接それぞれの島の人々のことを発言した。1943年8月1日に軍司令官の原田熊吉大將(*Letjen Harada Kumakichi*)はインドネシアにおける四つの新政治参与の政策を宣言した。

四つの新政治参与の中身は次のようである：1. 中央参議院の設立、2. 参議会の設立、3. 軍政官におけるインドネシア人顧問任命、これには、*Professor Supomo, Mochtar bin Prabuningrat, Prawoto Sumodilogo, Mr. Muhammad Yamin, Mr. Suwandi, Dr. Rasyid* が任命された。4. 軍政府及び軍政府機関関係のインドネシア人を任命。この新政治参与の政策は、インドネシア人を政府機関の官僚とし、国の経営に関する訓練をするという目的で設定された。中央参議院の役割は軍司令官に提出される質問に答え、軍政官の顧問でもあった。これに関し、*Prof. Dr. P. A. Husein Jayadiningrat* を庶務部に、*K. H. Mas Mansur* を顧問に、*Sutarjo Kartohadikusumo* は、ジャカルタ特別市長に、そして、*R. M. T. Suryo* ボジョネゴロ (*Bojonegoro*) は特別市長に任命された。

## 7. 太平洋戦争の盛り上がりでインドネシア独立準備調査会の設立

1944年8月に入ると、日本軍に占領された地域は次々にアメリカ軍から激しい攻撃を受けた。原料、石油、武器、食料の減少、またアメリカの攻撃で次々と艦隊が沈むなどの困難の中で日本軍の戦意も減少しつづけた。アメリカ軍がニューギニア、ソロモン、マーシャル諸島、サイパン島を奪った後、太平洋における日本軍の戦線は弱体化した。この悪状態に直面すると、東条英機首相は1944年7月17日に小磯国昭 (*Jendral Koiso Kuniaki*) を総理大臣に任命した。小磯総理は戦争をつづける方針で、インドネシアの占領政策をつづけようとした。しかし、太平洋戦場の日本軍の敗北の結果、インドネシアにおける占領政策を変えざるを得なかった。

1944年9月7日外交関係の演説で、小磯総理大臣は、次のように語っていた。「…東インド (インドネシア) 国民の政治参加に関して日本政府は協力して国民に保証を与え、将来のインドネシア独立を認め、さらに東アジアの人種も保証せざるべか

らず…」<sup>5</sup>。そして、ジャワ島の占領政策も改善された。参与を増加し、中央参議院議員を拡大し、副長官にインドネシア人が任命された。1945年3月1日インドネシア独立準備調査会が設立された。1945年5月25日軍政官は独立準備調査会の会長として、*Dr. Radjiman Wediodiningrat* を任命した。1945年5月29日-6月1日に第1次総会を開いて国家原則案が討論された。つづいて、1945年7月10日-16日に行われた、第2次総会で、国家憲法案が討論された。独立準備調査会が解散された後、1945年8月7日独立準備委員会が設立され、スカルノは委員長になり、ハッタは副委員長として任命された。独立準備委員会は21人の代表者からなっており、ジャワ島代表は12人、スマトラ島代表が3人、スラウェシ島代表が2人、カリマンタン島代表が1人、ヌサテンガラ島代表が1人、マルク代表が1人、そして中国人系の代表が1人であった。

## 8. 日本の独立約束と敗北

太平洋戦場で、日本帝国軍は敗北し、フィリピン基地と最後の日本帝国軍の沖縄戦線もアメリカ軍により奪われた後、1945年8月6日に広島、そして長崎には9日に原爆が落とされた。当時の南方軍司令官の寺内将軍は、インドネシア独立準備を討議するため、スカルノ・ハッタ・*Dr. Radjiman Wedyodiningrat* をサイゴンに招待した。ジャカルタの軍政官部代表もこの会議に参加した。サイゴンを経て、*Dallat* (ダラトス) でインドネシアの独立準備が討議された。*Dallat* で寺内将軍は「日本帝国政府は、インドネシアに於ける独立を与え、独立準備について、独立準備委員会に任せる」と通告した<sup>6</sup>。1945年8月13日スカルノ団体は、サイゴンを後にして、ジャカルタに向かった。シンガポール (*Singapore*) で団体が一泊して、*M.T. Moch Hassan, Dr. Amir, Mr Abas* の独立準備委員会のスマトラ代表に会い、太平洋戦争の最新の情報、ロシアが日本に戦争布告をしたことなどについて討論した、さらに独立準備についても意見を交換した。8月14日スカルノ・ハッタ団体がジャカルタに到着し、ケマヨラン (*Kemayoran*) 空港で軍政官代表に迎えられた。ケマヨラン空港で歓迎する群衆の中でスカルノは次のように発言した。「…昔私はとうもろこしは実る前にインドネシアの独立が実現できると思った」…今私はとうもろこしの花ができる前に、インドネシアの独立が実現できると言わなければならぬ」<sup>7</sup>。スカルノの発言を聞く群衆は独立の精神に燃えていた。ケマヨラン空港からスカルノ・ハッタは官邸へ行って最高指揮官の長野将軍に面会した。長野将軍の使命によるとインドネシア独立

5 Soetopo Soetanto, "Pendudukan Jepang dan Kemerdekaan Indonesia (日本占領とインドネシア独立)" 第五回インドネシアに於ける日本研究全国ゼミナーの論文、ダルマプルサダ大学、1990年11月29日-12月1日。

6 同上

7 *Setahun Seumur Jagung* (*jagung* はとうもろこしで) 百日、つまり3ヶ月の意味を持っている。インドネシア独立は3ヶ月以内に実現しなければならないという意味をもっている。

準備に当たって、独立準備委員会が十分に役割を果たさなければならないと強調した。

ハッタは 14 時ごろ家に着いた。ハッタの家にスタンシャフィウル(*Sutan Syahrir*)が既に待っていた。ハッタは、インドネシア独立は、我々の手にあり、ただ独立の実現は独立準備委員会に任すべきだ、とハッタが語った。スタンシャフィウルは「日本が戦争に敗北したため、連合軍はすぐ日本を占領するはずで、もし、インドネシア独立はインドネシア独立準備委員が宣言することになったら、インドネシア独立は、日本が与えたものと解釈される。だから、できるだけ、インドネシア独立宣言はインドネシア国民指導者かつインドネシア国民の代表者であるスカルノによるラジオ放送で宣言すべきだ」と強く意見をのべた<sup>8</sup>。

ハッタはスタンシャフィウルと同感であるが、「スカルノは自分で独立を宣言するかどうか、さらに独立はすぐに実現できるかどうかは疑問である」とハッタが答えた。その後二人はスカルノの家に行き、独立のことを相談した。ハッタが考えた通り、スカルノはスタンシャフィウルの意見に反対した。スカルノは次のように語った。「私は一人で行動する権利がない…その権利及び義務は独立準備委員会にある。独立は目の前にあり、私は独立準備委員長であり、もし、一人でこういうことをすると、変な行動であり、遺憾なことでもある」<sup>9</sup>

1945年 8 月 15 日、スカルノ、ハッタ、スバルジョ(*Achmad Soeardjo*)は軍政官部に行ったが、軍政官部に軍政高官は一人もいなかった。そして彼らは軍司令部に行った。そこでスバルジョは前田部官府に、日本の敗北について聞いた。前田は、「日本の敗北について、連合軍のラジオ放送から聞いたが、東京政府からまだ情報が入っていない」<sup>10</sup>と答えた。

日本の敗北情報を聞くと、スカルノ・ハッタは 16 日に独立準備委員会の会議を開く計画をし、全国の委員全員が集まって来た。

独立宣言の方法について年寄り世代(*Generasi Tua*)と青年の世代(*Generasi Muda/Pemuda*)の見解が合わなかった。スカルノ・ハッタ・スバルジョの年寄り世代は、独立整備また宣言は「独立準備委員会により宣言するべきである」という意見だが、青年世代のスバヂオ(*Subadio*)・スビアント(*Subianto*)・ウィカナ(*Wikana*)・スカルニ(*Sukarni*) チャエルルサレフ(*Chaerul Saleh*)等は独立整備・宣言について、「日本が設立した独立準備委員会がするべきではない。何故ならば、独立準備委員会が独立宣言をすると、インドネシアの独立はまるで日本が与えるかのように解釈されるから困る」という論争があった。

8 Soetopo Soetanto, "Pendudukan Jepang dan Kemerdekaan Indonesia (日本占領とインドネシア独立)" 第五回インドネシアに於ける日本研究全国ゼミナーの論文、ダルマプルサダ大学、1990 年 11 月 29 日-12 月 1 日。

9 同上

10 同上

同日の22時に、青年代表はペガンサアン通り56番 (*Jalan Pegangsaan Nomor 56*) のスカルノの家に行き、インドネシア独立宣言はその晩ラジオ放送でスカルノが宣言するように要求した。彼らの要求はペガンサアン通り16番で行われた会議で決めたのであった。スカルノは青年代表の要求に反対した。「日本はインドネシアを独立させる約束をしたし、さらに翌日インドネシア独立準備委員会が総会議を開くから」とスカルノが反発した。スバルジョウやハッタもスカルノを支持し、青年代表の要求に反対した。青年代表は彼らの要求を再びスカルノに強く勧めた。同日の24時まで独立宣言をラジオ放送で宣言すべきだ。なぜなら「インドネシア独立は日本のプレゼントではない、インドネシア国民の戦いの成果である」と青年がスカルノに反発した。そして、青年代表はチキニ通り71番 (*Jalan Cikini Nomor 71*) に戻って、次のステップを計画した。

## 9. レンガスデンクロク事件 (*Peristiwa Rengasdengklok*) と独立宣言

16日午前4時に青年代表は、スカルノ・ハッタを東ジャカルタのレンガスデンクロクに連れて行った。レンガスデンクロクは義勇軍 (*Peta Army*) の根拠地であった。なぜレンガスデンクロクに隠されたかについては、もし独立宣言後反乱が起こると、義勇軍はスカルノ・ハッタを防衛することができるからだという青年の戦略イであった。スカルノ・ハッタが隠されたことを、スヂロ (*Sudiro*) がスバルジョに伝えたが、スヂロはスカルノ・ハッタがどこに隠されているかはっきりわからなかったようである。スバルジョはスカルノ・ハッタを見つけるためにウィカナ (*Wikana*) と武官府の前田を訪ねた。なぜ武官府を訪ねたかという、もし陸軍がスカルノ・ハッタを隠したとすれば武官府の前田がこの問題を解決することができるだろうとスバルジョは考えたからである。スバルジョは昭和通り1番地 (現在 *Jalan Imam Bonjol*) に着いた時、前田は驚いた。前田は「なぜスカルノ・ハッタが来なかったか…私は日本の敗北についてスカルノ・ハッタに伝えようと思った。日本の敗北については東京政府から報告された」<sup>11</sup>と前田が伝えた。そしてスバルジョはスカルノ・ハッタを見つけるためにまたウィカナの事務所に行った。ウィカナはスカルノ・ハッタの隠れ場所を秘密にしたが、ユスフクント (*Jusuf Kunto*) という独立運動家が着いた時ウィカナはスカルノ・ハッタの隠れ場所を教えた。スカルノ・ハッタの隠れた理由は、陸軍がスカルノ・ハッタを逮捕しないようにするためであるとウィカナが語った。ウィカナの答えを聞くと、スバルジョが「陸軍に逮捕されるとい、心配は不要だ…なぜかというもし陸軍がスカルノ・ハッタを逮捕すれ

11 Soetopo Soetanto, “Pendudukan Jepang dan Kemerdekaan Indonesia (日本占領とインドネシア独立)” 第五回インドネシアに於ける日本研究全国ゼミナーの論文、ダルマプルサダ大学、1990年11月29日-12月1日。

ば、海軍がスカルノ・ハッタを助けるからである」<sup>12</sup>と確信をもって語った。スバルジョの発言を聞いた後、ウィカナはスカルノ・ハッタの隠れ場所を教えた。スデロとユスフクントと共にスバルジョはスカルノ・ハッタの隠れ場所に行った。

16日16時に、スデロはユスフクントやスバルジョと一緒にレンガスデンクロクに行き、18時に着いた。しかし、スバルジョは簡単にスカルノに会えなかった。スバルジョは独立をもっと早めに宣言するようにスカルノに会おうとするのだと説明した。そのために、すぐスカルノを釈放しろとスバルジョは青年集団に要求した。

21時にレンガスデンクロクを出発し、23時ごろにジャカルタに着いて、前田武官府に行った。23時頃前田自宅で独立準備委員会が会議を開いた。会議の途中、前田とハッタとスカルノと一緒に総務部長の西村将軍の自宅に行った。スカルノは会議を続けるかどうか西村将軍に相談し、「もし、明日の独立準備委員会が会議を開いたら大丈夫だが、今晩は駄目だろう。なぜなら、状況が既に変わったからだ…」<sup>13</sup>と西村将軍が反対した。西村は、「午前中からジャワ島を占領していた日本軍は、敗北したため連合軍の命令に従わざるを得ないから、日本政府は残念ながらインドネシア独立の約束を実現できなくなり、独立準備委員会の会議も許可されない」<sup>14</sup>と西村が付け加えた。西村の説明を聞くと、スカルノは不満で、前田の自宅に戻った。

前田の自宅に独立準備委員会全員とジャカルタにいる中央参議員、さらに独立運動指導者が集まった。前田の自宅でスカルノは西村の会見について語った。そして、スカルノ・ハッタ・スカルニ・サユチメリク (Sayuti Melik) は別の部屋に移動して、スカルノは独立宣言の草案を手書きで書いた。独立宣言の手書きの草案を会議で討論した後、また別の問題が起こった。誰が独立宣言にサインするか、または誰が独立宣言を発表するかという問題であった。会議で話し合った結果、スカルノとハッタが独立宣言にサインすると決めて、さらに二人が独立宣言を発表することに意見がまとまった。そして、手書きの独立宣言をサユチメリクがタイプで打った。スカルノの手書きの独立宣言は翌日の17日10時に東ペガンサアン通り56番でスカルノ・ハッタがラジオ放送で宣言した。その日からインドネシアは独立国家としての歴史を歩んだ。独立宣言の貴重な過程は前田武官府の自宅で始まった。

## 10. 結論

インドネシアの独立運動は長期にわたる歴史を持っている。350年間続いたオランダの植民地は一般インドネシア国民に教育を与えなかったが、インドネシアのブライヤイ（貴族）さらにある地域だけのエリートに対する教育だけが許された。西欧人向けの教育制度の実施は、インドネシアのエリートを教育させ、このエリートの権

---

12 Soetopo Soetanto、同上。

13 Soetopo Soetanto、同上。

14 Soetopo Soetanto、同上。

力を利用して、インドネシアを支配した。一般国民の多くは文盲であり、世界に起こっている出来事はぜんぜん分からない。だがオランダの優越的な植民のやり方に、国民はあまり気がつかなかったようである。さらに各村の村長を利用した支配も、一般国民は村の義務であるかのように理解した。ジャワ・スマトラ島におけるオランダの強制フランタシオンの経営も一般国民は、農村の義務であると思った。つまり、オランダの村長と共に、原住民の社会的文化的な伝統を利用してインドネシアを支配した。言い換えれば、平和かつ調和の中で、現地の国民を支配した。しかし、西欧人向けの教育を受けた一部のインドネシアのエリートは、西欧における自由主義、民主主義、国家主義の発展と共に歩み、インドネシアにおける国民主義の思想も一般国民に拡張された。1910年代にインドネシアの国民運動が発生した。この国民運動の種は日本占領時代に独立運動へと展開された。

日本軍政下に、オランダ植民地時代と違ってインドネシアの独立運動が益々激しくなった。日本軍政の占領から見ると、日本軍政占領の特徴は圧力的並びに社会文明対策の特色を持っていると思われる。日本軍政の教育政策と自立社会経済政策はインドネシアの独立運動に、強く影響を与えた。激しい日本軍政の弾圧の中で独立運動もさらに盛り上がった。国民は貧しい生活の中で、より自立的な社会平等の認識を生み出した。日本占領軍はアジア主義を宣伝したため、インドネシア国民の中に、アジア独立、さらに自国の独立という感覚を育てた。言い換えれば、インドネシア独立は、日本軍占領の時期に爆発した。日本軍占領はインドネシアのオランダ植民地解放であると同時に、社会文明開化の意義を持っていると思われる。

#### 参考文献

- Adam Malik, *Riwayat Perjuangan Sekitar Proklamasi Kemerdekaan Indonesia 17 Agustus 1945*, Jakarta, Penerbit Wijaya, 1975.
- Ahmad Subardjo Djojoadisurjo, *Lahirnya Republik Indonesia*, Jakarta, PT. Kinta, 1972.
- A.G., Pringgodigdo, *Tatanegara di Djawa pada Waktu Pendudukan Djepang: Dari bulan Maret sampai bulan Desember 1942*. Berita Ilmu Pengetahuan Populer No.1 1952, Djogjakarta: Jajasan Fonds Universitas Gadjah Mada, 1952
- Anderson, Benedicty R.O.G., *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance 1944-1945*, Ithaka and London: Cornell University Press, 1972
- 岸幸一、西島重忠『インドネシアに於ける日本軍政の研究』、東京、大隈記念社会研究所、早稲田大学、1959
- David Legge, John, 『インドネシア歴史と現在：学際的地域研究入門』（中村光男訳、The Simul Press, Inc., Tokyo, Japan, pp.224-225)
- Mohammad Hatta, *Sekitar Proklamasi 17 Agustus 1945*, Jakarta, Penerbit Tintamas, 1982.

Nugroho Notosusanto, *Naskah Proklamasi yang Otentik dan Rumusan Pancasila yang Otentik*, Jakarta, Penerbit P.N. Balai Pustaka, 1983.

Soetopo Soetanto, “Pendudukan Jepang dan Kemerdekaan Indonesia (日本占領とインドネシア独立)” 第五回インドネシアに於ける日本研究全国ゼミナーの論文、ダルマプルサダ大学、1990年11月29日-12月1日。